

地域に根ざしたフィールド施設の取組み

間宮 渉

北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 森林圏ステーション 北管理部 中川研究林

1. はじめに

北海道大学研究林は北海道6箇所、和歌山県1箇所ある学内共同利用施設であり、約 7 万 ha の森林フィールドを提供している。地方施設であるため、地元との連携が非常に重要であり、地域のとのつながりを重視した教育・研究活動を展開している。本報告では、2024 年度に実施した北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション北管理部中川研究林(以、中川研究林)における地域活動のうち、特に教育的意義の高い 3 つの取組みについて紹介する。

2. 地域連携による教育活動の展開

2024 年度、中川研究林では地域の役場や教育機関との協働を通じて、多様な自然体験型プログラムを実施した。以下に、代表的な三つの取組みについて述べる。

<音威子府小中学校 総合的な学習の時間>

音威子府小中学校の小学校 3～6 年生の”総合的な学習の時間”のプログラムとして「川と人との関わり」をテーマとした自然観察活動を 4 回にわたり実施した。児童は季節ごとの自然の変化を体験しながら、川に生息する生物やその痕跡を観察した。特に 10 月には「山の幸・川の幸」をテーマに、地域の自然資源について学ぶ活動を行い、食と自然のつながりを実感する機会となった。2 月には冬の森を探検するエクスカージョンを実施し、雪に覆われた森林環境の中で動物の足跡や焚き火体験を通じて、冬季の自然との関わりを深めた。

プログラムの内容は小学校の教員と綿密な打合せを行い、子どもたちが自分で興味を見つけて深めて行けるようなものを作り上げた。

<中川町幼児センター 川遊び体験>

中川町認定こども園からの依頼を受け、ペンケナイ川の浅瀬にて幼児向けの川遊び体験を実施した。園児たちは事前に捕獲された魚や川虫に触れることで、生き物への興味を育み、自然とのふれあいを楽しんだ(図.1)。活動は安全面に十分配慮しながら行われ、幼児期における自然体験の重要性を再認識する機会となった。



図.1 川遊びをする園児たち

<公認ガイド制度による地域連携>

中川研究林では、地域との協働を深めるため、2021 年より「公認ガイド制度」を導入している。この制度は、地域住民や関係者が中川研究林内で自然ガイドとして活動するための認定制度であり、地域資源の活用と環境教育の推進を目的としている。

制度の背景には、2013 年に中川町と北海道大学北方生物圏フィールド科学センター北管理部との間で締結された包括連携協定がある。さらに 2018 年には、町職員と大学教職員による「包括連携推進協議会」が発足し、地域と大学の連携をより実質的なものとする枠組みが整えられた。その活動の一環として、2021 年に公認ガイド制度が正

式に立ち上げられた。

公認ガイドになるためには、協議会への申請と審査を経たうえで、春・秋に開催される 2 回の講習プログラムを受講する必要がある。講習は座学とフィールド実習の両方で構成されており、森林生態学などの専門的な講義に加え、動植物の観察や調査体験、熊スプレーの噴射試験など実践的な内容も含まれており、参加者の理解と技術の向上を図っている(図.2)。

制度の運営は、中川町、中川研究林、そして札幌を拠点とする合同会社エゾリンクの三者による協働体制で行われているエゾリンクは、環境教育や地域活性化を専門とする北大ポスドクが立ち上げた組織であり、講習プログラムの設計や講義、教材作成などを中川研究林の職員と連携しながら担当している。

2024 年度には、町職員や地域おこし協力隊のメンバーなど計 9 名が認定されている。現在のところ、ガイドツアーの実績はまだないが、町では制度の継続的な運用のために予算を確保しており、林道整備や関連備品の充実が進められている。今後、公認ガイドによる自然体験プログラムの展開が期待されており、地域の自然資源を活かした持続可能な教育・観光の基盤づくりに貢献する制度として注目されている。



図.2 公認ガイド講習 座学とフィールドプログラムで構成される

3. おわりに

中川研究林のようなフィールド施設における地域活動は、教育・研究成果を地域に還元するとともに、地域に根ざしたアウトリーチの要として重要な役割を果たしている。今後も地域との協働を通じて、また、地域の中核となるような機関として、持続可能な自然利用と環境教育の推進を目指していく。